

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 5 月 25 日現在

機関番号：10101

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2015～2016

課題番号：15H05983

研究課題名(和文)中央アジアの移民労働によるグローカリゼーションとムスリム住民のジェンダーの変化

研究課題名(英文)Migrant labors, glocalization and changes of gender in Central Asia

研究代表者

菊田 悠 (KIKUTA, Haruka)

北海道大学・スラブ・ユーラシア研究センター・助教

研究者番号：30431349

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、ソ連崩壊後に中央アジアの3カ国(ウズベキスタン、クルグズ、タジキスタン)からロシアなどに向かう大量の労働移民が発生している状況に鑑み、彼らの移動と送金が出身地域にもたらす影響を労働移民の出身地と出稼ぎ先(ロシア)の双方で調査し考察した。その結果、労働移民は壮年男性を中心とするために出身地では女性の社会進出が進み、連絡手段のスマートフォンが情報化を促して、ジェンダーに変化をもたらしていることが明らかとなった。

研究成果の概要(英文)：This research analysed the way how gender had been changing in Muslim societies in Central Asia in the era of a massive wave of male labor migrants. It revealed that the traditional gender which tended to segregate young women inside home had become very hard to continue. This change is being caused by the rapid increase in exchange with foreign people, goods and information, and the spread of capitalism after the collapse of the Soviet Union. This change is no less significant than the change that occurred during the beginning of the Soviet era when the Soviet regime was desperately trying to change the lifestyles and worldviews of Muslim women. Many young women have smartphones to contact with their fathers or husbands now and they use them as a type of weapon to cope with the harsh lives of young Muslim women.

研究分野：文化人類学

キーワード：中央アジア ウズベキスタン 移民 ジェンダー 社会変化

1. 研究開始当初の背景

中央アジア5カ国(ウズベキスタン、カザフスタン、クルグズスタン、タジキスタン、トルクメニスタン)は1991年のソ連崩壊により独立して以降、政治的・経済的に混乱したが、2000年代に入ると各国の体制は安定し、社会も新たな発展の段階を迎えた。そこに大きな役割を果たしているのが移民労働である。ウズベキスタン、クルグズスタン、タジキスタンという3つの主要な移民送り出し国からは2005年の時点で総人口の10%前後、経済活動人口においてはその15~30%が国外に流出し、労働している。主要な移民先はロシア、中東、欧米、東アジアなどであり、故郷への送金はGDPの30%前後にもおよぶ。

この大量の人とマネーの国際的移動は、ソ連時代には域外との接触が比較的少なかった中央アジアにとって、グローバル経済との急激な接合をもたらした。また、移民の多くは労働可能年齢の男性であることから、中央アジア社会には女性が残されることが多い。それによって近年では既存の性別分業を超えた女性の社会的活動が見られるようになり、従来の地域的ジェンダー規範を揺さぶっている。私はこれまでウズベキスタンのイスラーム信仰実践の詳細を研究し、成果を上げてきたが、近年の社会変化の激しさから、これを研究対象とする必要性を痛感し、移民労働による中央アジアのムスリム社会におけるジェンダーの急速な変化を分析することとした。

2. 研究の目的

本研究の目的は、ソビエト連邦からの独立後四半世紀が経つ中央アジアにおいて、移民労働を主な契機として起きているムスリム住民のジェンダーの変化を、グローバリゼーションとそれに対するローカリゼーションの複雑な相互作用として文化人類学的に捉え分析することである。中央アジア各国ではソ連崩壊後に盛んになった移民労働が多量な人とマネーの移動をもたらした。急激な社会変化が起きているが、それを統一的な観点から捉えた研究は国際的に乏しい。本研究では、今回はジェンダーの変化を主要な対象としながら、日本でも鍛錬されているグローカリゼーション論を用いて他地域と比較可能な議論を構築し、中央アジアの社会変化に関する議論の先導とグローカリゼーション論の深化に貢献することを目指す。

3. 研究の方法

今回の研究期間内では、分析対象をジェンダーにしばり、移民の主要な送り出し国であるウズベキスタンにおいて、ムスリム共同体のジェンダー規範がどのようなものであり、近年移民労働を主としたグローバリゼーションによっていかに変化しているか、そこには誰にとってどのような利点あるいは新たな問題が生じているのかを現地調査する。ま

た、それに並行してグローカリゼーション論の先行研究分析(文献調査)および移民労働に関する先行研究分析(文献調査)を行う。

4. 研究成果

平成27年度は、中央アジアを中心にした移民労働と社会変化に関する文献調査をおこなった。この成果は「労働移民の社会的影響：移動と送金をもたらす変化」、宇山智彦・樋渡雅人(編)『新・現代中央アジア論』(仮題)日本評論社、2017年刊行予定に結実した。その内容は、まず「労働移民」を、雇用を求めて国境を越えていく者として定義し、ソ連崩壊後の中央アジア5カ国における労働移民の発生状況を時系列に沿って概観した。これにより、ソ連崩壊後の労働移民の発生は、2大資源国カザフスタンとトルクメニスタン以外の中央アジアの3カ国に偏っている上、その大多数はロシアで就労しており、これらの国々がソ連邦の中心であったロシアに独立後も経済的に大きく依存していることが明らかとなった。

続いて、中央アジア発の労働移民の主要な行き先であるロシアにおいて、彼らがいかに働き、どのような扱いを受けてきたのかを概観した。ここで注目すべきは、2015年から、高度な技能を持つ専門家を除き、ロシアでの就労を希望する者が1991年9月1日以前にソ連で発行された教育を証する書類を持っていない場合は、ロシア語とロシアの歴史、生活に必要な法的知識等に関するテストを受けなければならない、これに合格しなければ労働許可および居住許可が下りないという新制度が導入されたことである。このような労働移民の管理強化によって今後ユーラシア経済連合に所属するクルグズと、所属しないウズベキスタンおよびタジキスタンからの労働移民の待遇は大きく異なることとなり、後者の減少が予測される。

本論文では、ロシアや外国での労働経験が、個々の移民にどのような意識や行動の変化をもたらしているのかについても検討した。出身地コミュニティの支えを失い、出稼ぎ先で言われなき差別を受けた一部の労働移民が過激なイスラーム主義に走ってしまう現状は注意すべきものであるが、一方で大多数の労働移民とその家族は従来の穏健なイスラーム信仰実践を堅持していることを見逃してはならない。また、伝統的な共同体重視の規範を離れて生活した結果、特に若い世代の労働移民が個人主義や男女同権あるいはレディー・ファーストを掲げる欧米的規範に目覚め、異なるライフスタイルを選択する事例も、今後の中央アジア社会の変化を考える上で重要である。

労働移民を送り出す側の社会では、送金が多くの人々の生活を安定させるばかりでなく、人生儀礼において蕩尽されやすいこと、消費主義や新たなライフスタイルをもたらしつつあることが注目すべき点である。また、

壮年の男性を中心とする大量の労働移民の発生が既存のジェンダーを変化させる可能性についても明らかにした。夫や父親不在の故郷に残されたムスリム女性のうち、特に子供が幼いあるいはいない女性が夫の家族と同居している場合に、浮気やそれに関する地域の噂を恐れた夫の家族によって、従来のジェンダー規範をより厳しく要求され行動や服装を制限されがちである。一方で、女性の性的規範に厳しい中央アジアの社会構造や家父長制の再生産に、特に年長者の女性自身も積極的に関与していることが明らかであり、中央アジアのムスリム女性が一方的な犠牲者とはいえない。近年では、既存の社会構造やジェンダー観によって苦しい労働移民生活と故郷での家族や地域の絆の維持に腐心しなければならぬ中央アジアのムスリム男性の苦境 [Reeves 2013] や、既存の社会構造そのものを変革しようとしてきた先駆的なムスリム女性 [Peshkova 2013] などに焦点を当てる試みも進んでいる。私は故郷に残された女性たちが、壮年の男性不在のなかで地域共同体を支えるために、既存のジェンダーの範囲を超えた活動を行っていることを指摘した [菊田 2015:60-62] さらに、女性自身が労働移民やその家族として国境を越えて移動することで、一層の社会規範の変化を促す側面があることも注目される [Kikuta 2016:99-100]

平成 28 年 4-5 月および 9 月には、ウズベキスタンとロシアにおけるフィールドワークを行ない、その後研究成果を論文として執筆し、学会発表を行なった。まず 2016 年 10 月に東アジア人類学学会にて <Rebel brides with smartphones: the changing gender roles in Contemporary Uzbekistan> という発表を行なった。これは移民労働によって壮年の男性が少なくなった中央アジアの社会で、出稼ぎする父や兄弟との連絡手段として仕送り金で購入したスマートフォンを使いこなす若い女性たちが増加し、スマートフォンを通じて得られる情報や連帯機能を駆使して、従来は若い女性の自立的な行動を妨げていた地域のジェンダーを変化させている状況を報告したものである。この内容は近々論文として発表予定である。

次に 2017 年 1 月に、北海道大学スラブ・ユーラシア研究センターとソウル大学のロシア東欧ユーラシア研究所の共催国際シンポジウムにて、<Four types of migrants from Uzbekistan to Russia: specifying sources of "otherness"> と題した発表を行なった。これは従来、一面的なイメージで語られがちである中央アジア発のロシアにおける労働移民を、その行き先がモスクワ、サンクトペテルブルクのような大都市であるか、地方の都市や町であるか、また職種が医師や技師などの高待遇のエリート移民であるか、単純労働の非エリート移民であるかによって 4 分類し、それぞれの特徴を分析し

たものである。さらにホスト社会のロシア人が中央アジアからの労働移民のどのような点を「他者」と感じるかを検討し、上記 4 分類と比較した。その結果、最も「他者」と表象されやすい大都市における非エリート移民が厳しい待遇を受けやすいが、エリート移民はロシア社会に適応し活躍していること、地方の非エリート移民は近年のロシアの経済危機の影響を最も受けやすいことなどが明らかとなった。

<引用文献>

菊田 悠 2015 「ウズベキスタンのマハッラにおける経済・社会変化とイスラーム：2000 年代を中心に」、藤本透子(編著)『現代アジアの宗教：社会主義を経た地域を読む』35-76、春風社。

Kikuta, H. 2016 "Remittances, rituals and reconsidering women's norms in mahallas: Emigrant labour and its social effects in Ferghana Valley" *Central Asian Survey* 35(1): 91-104.

Peshkova, S. 2013 "A Post-Soviet subject in Uzbekistan: Iskam, Rights, gender, and other desires." *Women's Studies*, 42:667-695.

Reeves, M. 2013 "Migration, masculinity, and transformations of social space in the Sokh Valley, Uzbekistan." Laruelle, M. (ed.), *Migration and social upheaval as the face of globalization in Central Asia*, 307-331. Leiden: Brill.

5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計 2 件)

Haruka Kikuta, "Venerating the patron saints of Muslim ceramists in Uzbekistan." *Central Asian Survey* 36(2), 195-211, 2017. 査読あり.
<http://dx.doi.org/10.1080/02634937.2016.1261801>

Haruka Kikuta, "Remittances, rituals and reconsidering women's norms in mahallas: emigrant labour and its social effects in Ferghana Valley." *Central Asian Survey* 35(1), 91-104, 2016. 査読あり.
<http://dx.doi.org/10.1080/02634937.2015.1088229>

<http://hdl.handle.net/2115/64772>

〔学会発表〕(計2件)

Haruka Kikuta,

“Four types of migrants from Uzbekistan to Russia: specifying sources of < otherness > ”

SRC/IREEES Joint symposium, January 30, 2017.

北海道大学 スラブ・ユーラシア研究センター：北海道・札幌市

Haruka Kikuta,

“Rebel brides with smartphones: the changing gender roles in Contemporary Uzbekistan”

East Asian Anthropological Association 2016 Meeting in Sapporo, October 16, 2016.

北海道大学：北海道・札幌市

〔図書〕(計5件)

菊田 悠「労働移民の社会的影響：移動と送金をもたらす変化」、宇山智彦・樋渡雅人(編)

『新・現代中央アジア論』(仮題)日本評論社、2017年刊行予定。

菊田 悠「第27章 人々のなかのイスラム」、帯谷知可(編)『ウズベキスタンを知るための60章』明石書店、2017年刊行予定。

菊田 悠第28章 職人の世界 陶業」、帯谷知可(編)『ウズベキスタンを知るための60章』明石書店、2017年刊行予定。

菊田 悠「第60章 陶芸交流から日本語学校へ 日本語の通じる町リシュタン」、帯谷知可(編)『ウズベキスタンを知るための60章』明石書店、2017年刊行予定。

菊田 悠「ウズベキスタンの歳時記」、中牧弘充(編)『世界の暦文化事典』丸善出版、2017年刊行予定。

〔産業財産権〕

なし

出願状況(計0件)

なし

取得状況(計0件)

なし

〔その他〕

ホームページ等

なし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

菊田 悠(KIKUTA, Haruka) 北海道大学・スラブ・ユーラシア研究センター・助教

研究者番号：30431349

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし

(4) 研究協力者

なし